

教職員総会での所信表明

2016年10月3日

尾池和夫

2016年度の後期を迎えて、今学長として考えていることをいくつか述べます。

まず第1は、本学の教職員の皆さんが、大学に学ぶ学生たちのために仕事をしている毎日の姿に接して、その熱意に心から敬意を表し、感謝していることを伝えなければなりません。

京都造形芸術大学では、毎年1回生が全員参加で、ねぶたを制作展示する行事があります。2016年度のねぶたの課題は「刻」でした。21基の力作が、締切りぎりぎりまでに、見事に仕上がり、9月14日夕刻、多くの学生教職員が参加して点灯式が行われました。その感激いまだ覚めやらぬ中、春秋座で表彰式があり、学長賞には「光らせたいもの」が選ばれました。その他多数の賞が発表されて歓声が上がりました。

中でも、今年新設された青森市長賞は、青森市からねぶた職人が2人審査に参加されて、「コントラバス」を選んでくれました。楽器の木の肌まで表現された技術が高く評価されました。青森市との間には、連携のための総括協定が締結されており、今後、ねぶた、トリエンナーレなど、教育活動への連携が継続されることになりました。京都造形芸術大学の学生たちの作品は青森市に展示されています。

今回の学長賞に選ばれた作品は、体育館の舞台に設置されていました。その窓の外には十三重の石塔が建っています。学園の創設者である故徳山詳直前理事長が、その想いを込めて建立した塔で、瓜生山に眠る霊が祀られ、学園の基本理念の象徴であると言える石塔です。

ねぶたの点灯式に続く学園祭には、人間館1階での計測で、合計23351名が来られました。昨年より8025名増でした。オープンキャンパスにも75名増の925名が参加されました。アンケートにはたいへん高い評価が記入されており、例えば、来年は作る側に立って参加しますという頼もしい決意もありました。

第2には、先ほど教職員の姿に接して申しましたが、これを言い換えると、姿の見えない教職員は、どうしておられるかをいつも気に留めているということを申し添えておかなければなりません。私は出張中にも、ソーシャルネットワークの書き込みを読み、本学のウェブサイトを観き、さまざまのニュースメディアに注意しています。本学の教員や卒業生たちは世界の各地で活躍しており、そのニュースに接することはたいへん嬉しいことです。

第3には、姿の見えない教員の中に、もしかしたら教育活動が活性化できていない方がいるのではないかという不安もあるということ、正直に申し上げておきたいと思えます。本学では、7つの能力を身につけるための教育目標の次に、自ら学び、自ら活動する学生として育てもらう方針を掲げています。そのためには、大学として決定した方針に、教職員の全員が我が事として、その実践に人一倍の努力を競っていただくことが必要です。

先日、学長会での片上先生の報告を聞いて、たいへん心配になったことがあります。それは本学の意思決定システムがたいへんよくできているという報告でした。私も、委員会で検討した結論を学長会で決め、代表教授会で学科長の先生方に理解していただき、学

科の先生たちがそれを粛々と実行するのが本学のシステムと理解していたのですが、事柄によっては決定された方針が必ずしも現場で実行されていないことがあるという報告がありました。さまざまのご意見の中には、委員会は不要ではないかという考えもありました。

来年度に教育の認証評価を受けるために、今年自己評価をする年です。意思決定のシステムがよく出来ていることは望ましいことではありますが、その決定したことが実行されていることが重要であり、決定されたことが構成員1人ひとりの自分のものになっていることが最も重要なことでもあります。

例えば単位の実質化で大切なことは、セミナーを開設している場合、それが半期に15回実行され、毎週のセミナーで学生1人ひとりの現状が、教員によって精密に把握されていることが重要です。そのことが就活につながり、卒業に繋がります。この極めて当然のことが、学科によって、あるいは教員によっては実現していない可能性が見えてきました。それを確認するために、実態調査を行うことにいたしました。その結果を見て、例えば委員会の制度を根本的に見直し、本学の意思決定の仕組みを見直すことも必要ではないかと、私は今、考えています。

学生の1人ひとりが本学での学習成果を持って世に出た後、本学での学習成果を高く評価してくれることが大切であり、すべてのことが学生のためにという合い言葉で実行されていることが重要であります。

皆さんには、この際、日本の教育に関する法をあらためて読んでみてほしいと思います。学校教育法の第93条には、教授会の役目が定義されており、今日のこの教職員総会の位置づけもその定義を基に定められていなければなりません。また、第百九条には、一定期間ごとに自ら点検及び評価を行い、その結果を公表することや、認証評価機関による評を受けることが定められています。さらに大学設置基準の第13条の2には、「学長となることのできる者は、人格が高潔で、学識が優れ、かつ、大学運営に関し識見を有すると認められる者とする」とあり、私はこれを時に読み直しています。また、教授などの資格も第14条に書かれていますので、ぜひ参考にして頂きたく存じます。それを基に自己点検をお願いしたいと思います。

第4には同窓会のことです。瓜生山学園は40周年を迎え、今年10月9日、「開学40周年記念事業学校法人瓜生山学園第1回 ホームカミングデー」が実施されます。瓜生山学園の魅力、思い出を卒業生たちと語り合いたいと思います。京都芸術短期大学、京都造形芸術大学を巣立った多くの方々に集まってほしいと思います。京都造形芸術大学公式Facebookページのプロフィール画像は、10月1日から秋バージョンに模様替えされており、美術工芸学科日本画コース卒業生の日本画家・イラストレーター鬼頭祈(きとういり)さんが描いたものです。「学校法人瓜生山学園第1回 ホームカミングデー」スペシャルサイト (<http://www.uridou.jp/hcd/>) も開設されています。

この機会に、卒業生の皆さんの本学に対する批判、さらなる改善のための意見も大いに聞いてみたいと期待しています。

第5には、学生のために学園の安全を提供するということです。先日、学園では防災訓練を実施しました。教職員の皆さんにはたいへんな協力をいただき、成果がありました。8月26日(金)10時から、左京消防署の指導を受けつつ防災訓練を実施したものです。学食から出火したという連絡が訓練の本部に届きましたが、間もなく消化栓の前に物があって初期消火に失敗という連絡があり全員避難することになりました。消化器の扱い方を

実習した後、専門家の厳しい指摘を受けましたが、それを真摯に受け止め、ただちにさまざまの改善が行われたのも見事でした。

旅先では非常口や消化器の位置を確認したりするのですが、勤務先のことは意外に知らないものです。訓練をきっかけに消火栓などに目が向くようになります。ビーナス像の横に消火栓と消化器があり、いかにも芸術大学らしいという発見もありました。防災用品を備える方針も決定され、学生たちの安全を最優先にして、学園の整備と努力が続けられていることを報告しておきます。「安全」な学園の状況を学生の目に見える状況にすることによって、学生が納得して「安心」するということが重要で、「安全安心」な環境という言葉が本物でなければなりません。

また、耐震化工事も引き続き実施します。来年4月の都をどりと秋の温習会は本学の春秋座で開催されますが、それに間に合うように人間館の天井の改修などが行われます。ご不便をおかけしますが、ご協力をお願いします。

第6には、学園のあちこちをよく観察していただきたいと思います。新しくカフェVerdiが開店し、すでに多くの方たちが利用しています。本物のコーヒーの味を楽しむことができるカフェができました。智勇館には、学生の作品が道路から見えるように展示されています。

大階段の中程の場所に、最近、武藤順九さんの「風の環」が設置されました。この石は、ミケランジェロが好んで使用した大理石と同じ石です。ミケランジェロは、山に足をはこんで、自ら石を選び、「私は、その大理石の中に天使を見だし、天使を自由にするまで彫り続けた」と言ったと伝えられています。本学の教育の基本に対応するような言葉であると思います。武藤順九さんは、イタリアのピエトラサンタの工房で「風の環」の多くの代表作を彫刻します。例えば、2000年グランプリ受賞作「風の環」はバチカンの夏の離宮に、バチカンの歴史上初の抽象モニュメントとして永久設置されています。大階段に設置された「風の環」は、近い将来に日本へ運ばれて石巻の復興公園に設置が予定されている彫刻の3分の1モデルです。これを見ながら、三陸の復興を祈る心を大切にしていこうと思っています。

瓜生山学園は大学の他に、京都芸術デザイン専門学校、京都文化日本語学校、子ども芸術大学を設置しています。大学には通学の芸術学部と通信教育部があります。それらの活動が同じ瓜生山のキャンパスを中心に展開されているのがこの学園の大きな特長です。その特長を活かすためには、教職員が相互に関心を持ってそれらに学ぶ学生たちのことを見守っている必要があります。そのことを改めて申し上げて、さらに相互に関心を持っていただくようお願いします。

第7には、大学院教育のことです。10月1日には新しく、文明哲学研究所の所長に松沢哲郎教授を迎えました。特に、第2次平和文明会議を開催することを中心にしつつ、科学、技術、学術、芸術の視点から「人間とは何か、芸術とは何か」を課題として、教育、研究、社会貢献に努力することにしています。多くの方々がこの活動に注目して参加してくださいようお願いします。

片岡真実教授を中心に、多様な価値観を共有し、現代アートを通して21世紀のグローバルな対話を重ねる拠点を実現する計画が進められており、私も大いに期待しています。京都から世界へ繋がるインキュベーションの拠点を作る計画です。京都に移転する文化庁との連携も視野において、このような計画を進めていきたいと思っています。

第8に、教育システム全体のことを述べておきたいと思います。本学では、一方では着々と新しい教育の仕組みを導入しながら、また一方では、伝統的な分野の強化に務めることも怠ることなく、教育と研究と社会貢献の大学の役目を果たしていきます。

新しい分野では、アキバのモーションキャプチャーなどの設備を本学の学生が使うための協定もできました。ウルトラファクトリーの充実も、劇場の充実も、基本方針として決定しています。名誉学位の規定もできました。各学科から大いに検討して推薦して下さるようお願いします。

大学からは、日本の教育システムの改革にも積極的に発言し提言することも重要です。私も大学の認証評価など、大学評価の仕事が続けており、さまざまな機会に積極的に貢献する所存です。日本では、大学への社会の期待が大きいです。その期待の中には、日本の教育システム全体の責任を単純に大学に押しつける考えも見られます。日本の大学進学率はたいへん低い状態が続いています。特に女子の進学率が低いままです。多くの人が高専教育を受ける機会をどうやって実現するかという課題が恒に残っています。

本学には、優れた通信教育の経験があります。その特長を活かすことも重要です。日本の初等中等教育の抱える根本的な問題点を分析し、アートリンクセンターなどの実績を活かし、例えば初等中等教育や高等教育の課程にも直接間接に参加しながら、一貫した教育システムを構築する努力も必要であろうと思います。

以上述べたように、学園には多くの取り組むべき課題があります。本学には、さらに伸ばしていくべき優れた特長も多くあります。いずれにしても、それらの問題点、特長を正確に捉えながら、教職員の皆さん1人ひとりが新たな気持ちで、何よりも心身の健康を大切に、毎日の仕事に取り組んでいただくことを願って、私の所信表明といたします。

ありがとうございました。